

特集

アイヌ文化復興・発展のナショナルパーク

ウポポイ（民族共生） 象徴空間誕生

私はこう見る



ノンフィクション作家
川嶋 康男

2008年日本政府が初めてアイヌを先住民族として認め、さらに19年4月「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律案」（アイヌ政策推進法）が参議院で可決され、法律として先住民族の位置付けがされた。

一方で、20年の開設を目指して白老町に建設が進められてきた、国立のアイヌ民族の文化振興拠点となるウポポイ（民族共生象徴空間）が4月24日誕生する。

アイヌ民族本来の権利でもある土地権、教育権、自決権と経済補償等の核心を抜きにしたまま、趣旨に沿ったアイヌ伝統文化の振興と未来に向けての取り組みをどう具現化していくのか。まさに「試される大地」の正念場を迎えることになったといえよう。

4月24日オープンへ

「ウポポイ」とはアイヌ語で「大勢で歌うこと」を意味するという。

明治維新後150年抑圧の風下に置かれ、同化政策が進められて民族の誇りすら奪われてきたアイヌ民族にとって、日本

政府による先住民族としての認知と法制化はこれまでの歴史に一点の灯明を灯すことにはなる。

ただ、民族共生象徴空間と並列に出来ないのは、アイヌ文化復興・発展を目指したナショナルセン



▲ウポポイ全景（ドローン de 街おこしプロジェクト・瀧谷栄氏 19年8月撮影）とウポポイを紹介するパンフレット（左上円内）



▲エスカレーター付きの高架橋を新設したJR白老駅

ターとしての趣旨とかけ離れた、観光振興を主眼としたテーマパークの色彩が濃いと思えるのは穿った見方だろうか。太平洋沿岸に縦に広がる白老町。JR白老駅から徒歩で10分ほど、ポロトの森の中に静かに横たわる泥炭湖沼・ポロト湖と湖畔の景観をそのまま取り入れた10鈔の敷地内



▲今年のさっぽろ雪まつりには「ウボボイ」の雪像が…(雪のHTB広場)

に、民族共生象徴空間として「国立民族博物館」「国立民族共生公園」を新設した。ポロト湖の丘には遺骨保管の慰霊施設を設け、これまでの学術調査として掘り起こされ持ち去られてきたアイヌの遺骨の返還を受けて祀る慰霊施設を設備し民族の尊厳を守り続けるというもの。

白老町に生まれ育ったアイヌ三大歌人の一人森竹竹市が叫び続けたように、民族の伝統文化を「見世物にするな」との警句

五感で味わう施設

施設概要に触れてみる。
*国立アイヌ民族博物館
北海道に初めて設立される国立博物館は、高さ20m3階建て、延床面積8600平方m。1階にはミュージアムショップ

は、果たして生かされるのだろうか。国・道・町が作成したPRパンフレットによると、文化振興の拠点としての趣旨は、先住民たるアイヌの文化と歴史を語り継ぎ、見て、触れて、感じて、味わって、憩うという五感での体験に沿ったプログラムが用意され、学術的な研究と研鑽、道内の博物館との交流等、博物館を土台としてアイヌ民族の文化や歴史への理解を深めてもらうというものだ。

を並べる基本展示室がある。アイヌ語の音声ガイド付き。特別展示室は海外にあるアイヌ民族資料などを展示、2ヵ月ごとに入れ替えるというもの。ガラス張りの窓が広がる2階ロビーからは、ポロト湖や敷地内を一望できる景観鑑賞への配慮も怠らない。
*国立民族共生公園
正面入り口には半円形の建物が向かい合った飲食物館や歓迎広場を設けたエトランス棟を配置し、売店やカフェ「ホープ」を運営する。

やライブラリーのほか100人収容できるシアターを設備し、2階に言語や歴史など6テーマ(ことば、世界、くらし、歴史、しごと、交流)で構成し約700点の工芸品

アイヌ民族の伝統的な古式舞踊やムツクリ(口琴)演奏を披露する最大536人収容の「体験交流ホール」は、半円形のステージと客席が一体となつて楽しめる構成が施されている。
最大で400人収容で

きる「体験学習館」では、アイヌ民族に伝わる食文化を味わい、ムツクリやトンコリ(五弦琴)等に

製作のほか、木彫りや刺繍による文様製作を体験できるプログラムも組まれる。湖畔にはかつてのアイヌコタンを模し、チセ(家屋)群を復元。あるいは広場を確保して四季折々の寛ぎの空間としてチサキ広場、共生広場なども設備されている。これら施設全体で対応するスタッフは総勢280人余り。博物館職員をはじめ関係施設の正社員から契約

ポロトの森に国内の大学が保管していた遺骨1287体(18年12月時点)を集約して埋葬している。尊厳ある慰霊施設を象徴するモニュメントとして

て、アイヌ民族が祈りの儀式に用いるイクパスイ(捧酒べら)をモチーフとした塔が建ち、毎年慰霊祭が執り行われる予定だ。

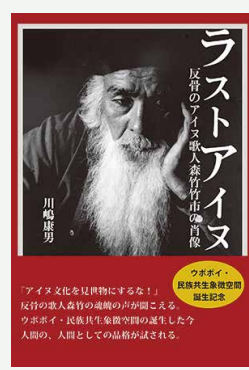
ウボボイ 白老町の取り組み

ただ、施設全体は国立であり、地元白老町として関わりを持てるのは所在地としての入り客対策が軸となる。

中核となる施設が町営の「インフォメーションセンター」だ。観光協会が入所して対応するのだが、特産品の展示販売や飲食等の提供から、多目的コミュニケーションも用意して交流の場とした。町内観光のための周遊バスも運行され、大人100円(子供50円)で駅からウボボイ慰霊施設「白老町仙台藩白老元陣屋資料館」を1時間ほど

アイヌ民族の復興を目指す その怒りを文学に込めて闘い続けた歌人の叫び

本誌19年9月号から4回にわたって連載された川嶋康男著「アイヌて必名



をば誇りに」が、新たに「ラストアイヌ―反骨のアイヌ歌人森竹竹市の肖像」のタイトルで、札幌の柏舎舎から出版された。明治・大正・昭和と民族差別の厳しい時代に、白老で全言の母から生まれ、鉄道員の傍らアイヌ民族の復権に短詩型文学で訴え、戦後はアイヌ協会の前身の組織化に尽力するなど、民族のアイデンティティーを取り戻すべく訴え続けた生涯を写している。
●1500円+税
四六判、ソフトカバー 256頁
全国の書店で販売中

社員、アルバイトを含め白老町にとつては相当の雇用機会が生まれることでの経済効果は大きい。
*慰霊施設
ポロト湖東側の高台、

路での利用はもとより、札幌や新千歳空港からJRが特急「北斗」を日中の停車駅とした。札幌から1時間、新千歳空港から40分という距離。駅北側にはエスカレーターを設けた高架橋を新設し、会場までの誘導路として「白老駅北観光商業ゾーン(ポロトミントラ)」を設けてウボボイとの一



▲結氷したポロト湖から復元アイヌチセを望む



▲慰霊施設とモニュメント

を確保。さらに公共施設の空きスペースの臨時駐車場化も検討するという。滞在型を目指すために、2カ所のホテル建設が計画されており、一つはウポポイに隣接する星野リゾートの温泉ホテルの建設である。

えは目標として数字を挙げるのは博物館では年間100万人、白老町としても300万人の観光客数を想定している。隣接する虎杖浜や登別温泉街との連携も視野に入れた夜間プログラム（営業時間120年9月1日～10月30日までの土日・祝日、夏期7月20日～8月31日、9時～20時）も生まれ専用の連絡バスの運行も予定される。

心に響く森竹竹市の短歌

民族共生のための象徴足りえる空間については、アイヌ民族のアイディンティティーに根差した伝統文化の振興として、「見せる」「触れる」「味わう」等体験型のプログラムで浸透を図るといふ。どう展開するにせよ観光振興の拠点を目論む以

上、多様な意見も出てしめるべきところだが、経済的支援の一策としてのこんな提言もある。「手始めに、ウポポイの敷地をアイヌ協会のものにして、国が借地料を払うというのはいかがか」というものだ。若いアイヌの奨学金の原資にし

てはという意見なのは、作家の池澤夏樹氏だ（19年7月8日付北海道新聞）。

一方で、ウポポイ（民族共生象徴空間）とした「共生」の言葉を受け

入れる前に、こんな諫言にも耳を傾けてはいかがか。北海道新聞のアイヌ問題の連載企画『こころ揺らす』（18年8月2日付）で紹介された、世界の先住民族政策に精通する元東京大学専任講師の寺地五一氏の談話である。「民族共生象徴空間」に「共生」という言葉を使うことに対して、「あらゆるものを奪っておきながら、いきなり『共生』というのは都合が良すぎる。『共生』の前に、当事者が納得するような謝罪と補償が必要だ」



▲白老民俗資料館前の森竹竹市氏（掛川源一郎氏撮影）

膨大な国費を投じてのウポポイ新設で、「謝罪と補償」の免罪符とするものではないだろうが、アイヌ民族の伝統文化の尊重という、大風呂敷を掲げることで、本質を覆う隠れ蓑ではないのか——と勘繰られるのではないよう心すべきだろう。われわれも、試されていくのだ。森竹竹市のこんな短歌が心に響く。〈誇高くアイヌ文化を守れかし 酒の肴にされることなく〉